

古典の日

十三

鳴子



南部道はるかにミヤりて、岩手の里に泊る。小黒崎・ミづの小嶋を過て、なるこの湯より尿前の関にかゝりて出羽の国に越むとす。此道旅人稀なる所なれば、関守にあやしめられ、漸として関をこす。大山をのぼつて、日既暮ければ、封人の家を見かけて舎りを求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云、是より出羽の国に、大山を隔て、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越べきよしを申。「さらば」と云て、人を頼れば、究竟の若もの、反脇指をよこたへ、櫂の杖を携て、我々が先に立て行。「けふこそ必あやうきめにもあふべき日なれ」と、辛きおもひをなして、後について行。あるじの云にたがはず、高山森々として一鳥声きかず。木の下の下茂りあひて、夜行がごとし。雲端に土ふる心地して、篠の中踏分、水をわたり岩につまづいて、肌につめとき汗を流して、最上の庄に出ず。彼案内せしおのこの云やう、「この道必不用の事有。つゝがなう送りまいらせて、仕合したり」と、よろこびてわかれぬ。跡に聞てさへ、胸とゞろくのミ也。



芭蕉もつた道をたのびたのちか(宮城県大崎市) 芭蕉庵ドットコム提供

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集2『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

光堂から奥羽の山越え

芭蕉は衣川の古戦場を引つた後、同じ日のうちに平泉の中尊寺に詣つた。藤原清衡が十二世紀初めに建立した壮大な寺であったが、五百六十年余りの変遷の後、経堂と金色堂(光堂)が当時の遺構として残されていた。この日の金色堂拝観の印象を後年作句して「おくのほそ道」に入れたのが、誰も知るあの名詩である。

建立以来何百年と降りつづけたはずの五月雨も、この光堂だけは降り残し、年経ることをさせなかったのか。お御堂は晴堂に覆われて、降り煙る五月雨のなかにいまも光を放ち、往年の栄華を憶はせている、という。小野小町の「花の色はうつりにけりな」の歌の「わが身世にふる(降る、経る)ながめ(長雨、眺め)せしまに」と同じ掛詞を用いながらも、「降残してや」とは実に巧みな動詞の工夫である。まわりの古木立を暗緑に濡らして降る雨のなかに、光堂の黄金の荘厳だけが光を宿し、あたりにその光をにまかせているのだ。翌五月十四日に一関を出立し、奥羽山脈の山麓を西南方向にたどり、岩出山、鳴子の先の尿前の関などを経て、出羽の国に入り、十七日夕方最上郡尾花沢に出るまでの長いわしわし山道は、おくのほそ道の旅のなかでも一番難儀な行程だった。旅人が稀れたから関所もきびしかった。その上に二日目の夜、まよやく峠を越えて出羽側の小集落、堺田の「封人」、つまり関所を守る庄屋の家に泊めてもらったときの作である。

「光堂」の幽玄の直後に蚤虱、それに枕もとの「馬の尿」まで登場して平然たるところが、俳諧の面白さだろう。古今東西の文学史上、このような時は他のどこにも見つかるまい。蚤が夏の季語だが、歳時記を繰ると「茶に例句が多いのもなすける(辻堂を蚤虱に借りて寝たりけり)。思はず、戦中戦後の少年にとつて、蚤も虱も蚊も蠅も、馬の路上での尿さても、日常の悩ましき伴侶であり、微苦菜の種だった。封人の家はいまりばに復元されて、訪ねれば大きな開扉裏に柴を焚いてくれる。



おくのほそ道

芳賀徹さんとたずねる

13

「こころときめく」価値

「よきときものたきてひとり、ふしたる」という枕草子の一文は、常に私の座右にあります。これは

古典と私

は、清少納言が「こころときめきするもの」として大切に考えていた物事の一つでした。たぎものとは、貴重な香料を配合

松栄堂 主人 畑 正高 さん



して練り整えたお香のことです。「いづくへいするの」ともあります。

ですか」と問われたことがあります。何とか再現してみようとたぎまな配合方を見つけ挑戦した

こともあります。女性がたぎめいてくださる香り、がもし再現できたら、自分だけのものにしたいと、なると、勘違いしたこともありました。

ある時ふと気付いたのです。彼女がときめいたのは、どのような香りではなく、どれほどに掛けたか、どのようにつけたか、という点なのです。たぎめく心に触れた気がしました。「たぎまなが作り残しておいてくださる

古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。



恋の成就を願う上賀茂神社境内の片岡社(京都市北区)

が感じられる。源氏物語千年紀を記念して、鞍馬石で歌碑がそばに奉納されている。片岡社の新調された五色の緒は、たくさん小さな鈴の音と共に恋の成就を祈る。十二単の式部の姿とその歌を描いた絵馬は双葉葵をかたどるといわれている。

「あおい」が「あふひ」にかけられすべての出会いを願うとされ、縁結びの社として、人々の間に伝わる。千年の時が流れ、いつの時代も出会いに心ときめかす祈りがつづく。

(NPO法人・都草 廣瀬 俊子)

片岡社に会いを願う

文学ウォーク

葵祭の行列は王朝絵巻をくりひろげながら、加茂街道を北西へ進み、世界文化遺産の上賀茂神社で路頭の儀が終わる。神社の二の鳥居をくぐると二つの立砂を前に細殿が見える。そばの御物忌川のせせらぎにかかる片岡橋を渡ると、第一禰社の片岡社がひっそりとたたずんでいる。その昔は鬱蒼とした社が広がっていたようだ。紫式部も何度か訪れ、「ほととぎす声待つほどは片岡のもりのしづくに立ちやぬれまし」(新古今和歌集)と詠んでいる。どのように将来をともにする人との出会いを想っていたのだろうか。熱い思いを胸にし、恋に憧れる乙女の心のはずみ